

泥江邑隠士「手きね」

まえがき

本文は、岩瀬文庫(西尾市立図書館)に収蔵されている「手きね」と題する美濃半裁判、墨付十九丁の内、十六丁分をしめる「手きね」の部分を活字化したものである。三丁分は「此物語は一書を得て写之、おあん物かたり土州の人筆記」とあって、「おあん物語」の抄録が収められている。「岩瀬文庫図書目録」には、「手きね」の成立年次を享保十五年とし、「国書総目録」も、これを受けて享保十五年としている。これは、この本の最後、おあん物語抄録末尾に「享保十五庚戌三月廿七日 谷恒守」とあるのをとったためである。

「手きね」は、序文末に「天明三のとし」の「麦歌のころに反古の裏に書集め」とあるから、天明三年の秋に成ったものであることが知れる。著者は「泥江邑隠士」とある。この泥江邑は、名古屋の泥江町(西区)をさすもののように

しかし、筆のたつ人でなかっただけに、かえって新鮮で生々とした部分の多いことが、私がこの本を紹介する理由の一つともなっている。そこで、この内容であるが、僧・百姓・町人・武士・禰宜の五人による名古屋を中心とする世の移りかわり振りを、お互に語り合う話言葉でつづられている。ほぼ享保いらい天明にかける名古屋と在郷のめざましい生活文化の発展を、名古屋言葉を使って語られ、その指摘が、衣食住にわたり、きわめて具体的であるだけに興味ぶかい。名古屋とその周辺の享保から天明にかける目を見はる商品生産の展開は、宗春・宗勝・宗睦の三代の藩主の時代で、いわゆる重商主義政策・殖産興業政策の反映でもあった。

復刻にさいし、名古屋言葉のため、わかりにくい部分は、できるだけ句読点を打ったほかは、原本をできる限り生かした。だから濁点付ところと濁点のない部分があり不統一なのも原本のままである。また()内のルビは筆者が付し、他のルビは原本のとおりであることを記しておきたい。

史料「手きね」

林 英夫校訂

に思われる。この「手きね」の終りのほうに、「我等、初詰の頃までは市買の館」と述べているところから、尾張藩の市谷の藩邸に詰めたことのある尾張藩士であったことが知られる。宝永山噴火の時、著者二、三才頃と書いているところから著者は泥江村に隠棲して、天明三年、八十才前後の頃に書いた書かと思われる。岩瀬の目録には、写本とあり、「国書総目録」には、岩瀬本しか出ていないし、序文の著者名のあとに落款「藤原氏・正斎」と読める二題を押しているところからみて、この岩瀬本は泥江邑隠士(藤原姓・号正斎)の自筆本のように思われる。この本が他に写本をみない孤本で、活字化されたこともないのは、この内容を一読すれば理解できるように、文意の通じない箇所が、いくつもみられ、誤字・当字の部分が多いことなどからみて、隠士は文筆に親しんだ人物でも、また、名のある人物でもなかったと思われることにある。

「手きね」

跡もなく先もなく、只不細工にて古風なる物へ何そ人に問へは手きねなるへしと云へり。まことに摺子木横槌の仕埋にもならず、外にはたらく才もなければ、めてためた乃麦歌乃比に反古の裏ニ書集て是か名とす。天明三のとし

泥江邑隠士書

藤原氏
正品

僧

百になれハ百色きくといふも誠でござる。百年斗以来、我等が覚えてから有て無ふ成た事も、又出来た事も大分ござる。其内、出家の口からハいかになれど、とかく大分の金銀集て大きな事乃出るハ何宗によらず寺で御座る。鐘鐺の、或は堂の建立のと云ハ、幾等と云数ハござらす。元禄の比か七寺の塔が出来る。八事の比丘寺が出来る。黄檗の東輪寺、本願寺の東掛所の本堂が新建、元の堂ハ今対面所と云のでござる。七ッ寺の大日の大像が出来る。西本願寺の懸所が出来る。近比東掛所の棧門が出来る。扱、此近年ハ三十三観音造立何ヶ所もあり、五百羅漢まで建立が出来ました。此間も遠州の秋葉へ町中から建立の大仏ハ、大キな事でござった。

百姓

百姓ハ養笠て事が済ましたが、今ハ木綿合羽も短かにてハ合点せず、傘も出来合でハ済ず、たばこも油紙ハ多く用いませぬ。

此たばこと云物ハ、慶長十年乙巳の比始て渡りましたげな。

丹波の国に始て是を植たによつて、丹波粉など云ましたげな。今ハ諸州の名産おびただし事でごさる。きざミたばこハ、山城の国、花山が始でごさる。諸国、此たばこにつるへる畑ハ大分の事、又たばこ入になる織物類。きせる其外是に付た道具数しきりはござらぬ。今の在郷の風俗むかしの名古屋よりハ能ふなりました。先ツ比琵琶島口のにぎわいを見さつて。何一つ無い物ハござらぬ。是か皆在郷相手の商ひでごさる。東ハ山手じやニよつて人の姿も古風に、又物もつかわぬによつて、大曾根口と比叻島口とハ煮売のくみ物迄が違ひます。そふでも東にハ少し古風が残而、出店の酒も地酒斗て東へ行ほど諸白はござらぬ。

此出店と云も、むかしハない事にて、兎角下もへくる物から錢をつかふ。あめに作る麦、おこしにする米もいかの事でごさる。いか様な所にもあめ、おこしのない所もござらぬ。

念仏講も豆いりをくみ、たて茶ふるまふ事であつたが、今ハ茶せんうる見せさへござらぬ。老人が寄れハ茶をたて

一、其主人え預ケ置キ疵付ケ候者ノ平愈次第、療治代出させ可申候。療治代出しかたきものハ、刀脇差取り上ケ、酒狂人ハ主人え相渡シ可申事。

但刀脇差其疵付候者へとらせ可申事。

一、右療治代疵之多少ニ不寄、中小姓跡之者ハ、銀武杖、徒士ハ金沓両、足輕中間ハ沓枚差出させ可申事。

酒狂申候テ人を打擲いたし候事。

一、右同断。但刀脇差取り上ケニ不及ハ身上限り諸道具取り上ケ、打擲に逢候者へとらせ可申事、但右之酒狂者之儀主人え断り之節欠落ト申立候共、主人方を罷出三日之内ニテ候ハ、欠落に相定申間数候事。

右之ニケ条町人ハ別而穿鑿申付ケ候次第 同断。但主人無之者へハ宿所え可呼出事。

一、酒狂にて諸道具損致候者の事。

一、過料出させ、損失之者にとらせ、輕き身上之者ニ限り可申付事。

門内酒を入れぬ石を建置て唐茶などと名付ケて酒のむ事ハ常でござる。俗家には、けつく是ほどのそむきハござらぬ。八九十年前ハ糟、味噌をこしらへ、召仕或ハ下々の食料に致せしが、近比ハ左様の物給さする事も承らぬ。

六七十年前迄ハ、町方に五月ののほりに朱紋ト云ハ一向稀に有た。今ハ朱紋でないハ一向なく、地も唐木綿で仕た

史料「手きね」

てふるまふ事であつた。

何ぞと云と餅をつき、うどんを打事、何よりのちそうなりしが、近年ハそば切を打、吸物もとうふでハ合点せず、それで在郷ニもそば切の上手が大分出来ました。

町人

百姓衆の云るる通りむかしと今トハ天地の違ひにて、流行のおくれとておらが云事ハ、若い衆が笑ひ物にすれと、町家ハ夫に色々の掛引有て算盤の上で利を取る筈の物になつて居るで、むかしから人にしたかゝるとふなりとして損さえせず、油断さへせねハ能ふござるが、近年は百姓衆が半分ハ商ひをして農乃片手間におらかまねせらるるによつて、一昧の仕むけが違います。

僧

説文に酒ハ就なり人性の善惡に就、又造なり。吉凶の造起する所也ト云へり。されど善と吉とハなくして大かた凶惡のミ多ふござる。迷乱して凶せざれば、酔飽して病を發し死に至る類、万之晝飲酒の戒、儒者よりハ甚しと誘れるもありと世の凶惡銘酩より起れるもの目に見、耳に聞る。古今少なからず、關東乱酔の御戒あり。

酒狂致し刀脇指ニ而疵付ケ申候事

て、或ハ四半の様な大き成も近年見へます。

武士ののぼりの飾ニ小キうす板にて、武者人形、或ハ大名の行列を作て高塀の屋根などに幾等も立並べ有たが、今さやうの物ハ絶てなく成た。其頃の子供等、是を屋根こじきと云ひおりました。

○ 五月節句のかぶとに蓬来と云物ハ、近年の事にて、蓬来の龜を、かぶとたてにのせて、めつらしいかざりが出来た。

○ 雖は紙雛か第一で、人形も木で作て、さゝしきしたるねり物や、はりぬきなどで五六寸斗有も衣裳着とても、かみの類乃ものにて衣裳着せたか有て、是ハずい分よいのであつた。大名うへツ方には、よいもあつたか存ぜぬか、下々でハ皆夫を立て事足た事で御座た。

○ 三月節句前に雛売、正月比ハ花餅売、三四月比ハ笠うり、師走の比ハ定煮碗、皮足袋、雪踏、此やうな商人も今は稀になり、美男草売ハ絶てなし。只近年おびただ敷多ふ成た物ハ、くわしやでござる。名古屋にまんぢゅうの有菓子屋は、両口屋の外一武軒ならてハ御座らなんだ。是ハいかふ遠からぬ事でごさる。其比ハ、まんぢゅうを出す急度致した馳走で、菓子に饅頭が出たと云おりました。其比、元ゆいやが二三軒有、きやら乃油屋が是も一二軒御座た。

武士

八、九十年前ハ少身でも諸士の妻たる分ハ勿論、平日ハ歩行なれとも年頭親類杯へ行節ハ、必ず乗物にのりて参りましたが、今ハ中から下ハ皆嫁入の時斗のやうに成り、それさへ、そろそろ成相に成りました。

○ 今ハ諸士のたちつけ着ると云事ハ、ない事の様に若い衆ハ思へるれとも、八九十年前ハ皆火事の節などには着おりましたが、其後野袴^{すそ}はそがはやり出てから、一向たち付ハ下賤乃服のやうに成りました。

○ 近キ世ハ武士、町人、百姓共に男女衣服が殊の外結構に成りました。八九十年前ハ武士も中より下の者ハ妻娘も冬ハ絹、夏ハさらしの染ものに極た事で、まれに紗、綾、羽二重を着る者あれハ珍らしい事のやうに思ひ、目ニかかりおりました。それが今ハ錦織物、帯などハ錦金入、今織、夏ハ紋紗。紋紹の類ひ斗に成りました。町方なども是と同様に成りました。

○ 家居も昔に合せてハ、物好無益の事が多ふござる。八九十年前迄ハ諸士も小身の家にハ天井もなふて、台所と外に寝間か一所斗くらゐの事で有て、台所にいろりをかまへ、其辺に家内打寄くらし、心易き客などハ其所へ通りおりました。さりながら、内庭の向ひに成共大かた既をしつらひ、馬持ほどの高の者ハ、せひ馬一疋ハかひて有たか、

げて、後ロえもとて、うしろ腰の間五六寸ほどあり。又長柄刀とて柄は目のさきにさしつかへるほどあり。かならずうでぬきを入たるハ太刀の制をうつしなしたるか、慶長の比、浮世又兵衛が書た絵がござる。皆是等の風俗でござる。

○ 上下のひだは小田原北条家諸士のする所を関東多くまなんだと云ます。或ル人が肩衣のひだハ信長より始ると織田貞置老人云れしよし。されども今少し前よりありし様ニも覚えまます。しかし上下のひだハ、はかまの事かも知れませぬ。正徳の比、五味蔓^{ヒメツヅナ}さかに流行して三州某の一ト谷取つくし、京、難波、東都ハさらなり田舎のすへくまで是を用ひぬハ御座らなんだ。元文の末迄ハ町家、いヶ様の裏町までも大分棚にある事であつた。

○ 近年所々沢山に出来た物ハくわしやで御座る。年々品々の新製が出来て箱にも色々の寄せ木切り入、又さぬしきの画など書きてかけなしとハ見へませぬ。京師にも此様な箱はござらぬ。扱いか様の小家裏町にも、しつぽく、とち汁と云かんはんを出シ、かたかげて商ひをするあり。近年ハ流行まする車ひきや、ばくち打の類が大分入込で殊の外利のある事じやげにござる。いやさ左様の者斗でハない。お諸士の子供達も大分ござる。へいとうな事ハ云へませぬ。

○ 銭を以名をよぶ物一文餅、五文とり、二八そばの類な

史料「手ぎね」

今其様な事ハ簡略して、無益の身の廻り、家作り、其外万事に花美をする世に変わりました。たまたま小身で馬持人ハ、ちん馬に借して銭を取りて馬くらうの様にしてくらす衆もござる。

○ 武士も髪を結に白しぼりを少付、紙よりを其時く水ごきにして結ふことござつた。女中も其通りて白しぼり、又水を付て結ふことござつた。それゆへ、びん水入とて、ぜひ櫛道具之内に有物で御座た。水付櫛とて今も名ハ残て居る。美男草などハ見た事もない人多ござる。それから、きやらの油がはやり出ました。是も初ハ今の透油と云物の通り貝に入てたりました。今のやうに堅くねりたるハ一向近比事で、扱、其きやらの油の売所が寛文の比迄名古屋に二三軒ならでハござらなんだ。もとゆいと云も、一二軒売所か御座た。

○ 天文以前の東国武士の風俗、中世鎌倉柳營の余風を伝へ習ふて鉄髻^{テツキ}をつけ、首実檢の時も、はくろめせし首を掛しとなり、又げつしきとて、木にて剪を作り、髪をぬきうすくして鬚毛を五味子蔓^{サツタ}にかてかため、髪^{カミ}の末をもミ、ふさのごとくにゆひ、或ハ付髪とて別に髪末のごとく作り、もみちちめて花ぶさの様にいたした。衣裳も素襖をかけ、えもとて、えりをうしろへ引さげ、小袖ばかり着る時も背の見ゆる程えりをのけてきるをよしとし、袴腰ハひきあ

り。一文けんさぬと云物、今ハ大方ござらぬ。とうふハむかしから六文、うなぎも三文、くし五文くしと云て大方、代の高下もござらぬ。

禰宜

○ 神書ト云ハ本伊勢二ノ宮御鎮座の故、代々迂宮の式等のミにて、道を教へ理を説たる書ハござらぬ。古事記、日本紀ハ我史記でござる。仏教に習合し、又聖賢の意味ニ合て、彼レハ秘なり是ハ大事なりと云様ニ覚へまます。何ぞ誠乃神道の書かあるか知りませぬ。

○ 仏具などもむかしとハいかふ替たそふにござる。昔山門南部乃古寺に在し物トハ替て居ります。建仁の比、千光国師入宋より法衣もあらたなり。近世隠元禪師来朝の後、黄檗のすがたを好ミ世に用います。

狭箱ハもと肩衣を竹に狭て持せた。中比ハ板にて狭などして持たせしが、山下大和守箱を作りて衣類などをも入てもたせしより広ふなりました。初メ竹に狭し名をすわれず、今も狭箱と云まする。

○ 間違寛た事もある物でござる。濃州の久々利に昔景行天皇泳宮の、宮行在の時、水中ノ鯉をえい覽ありし、其入り江がござる御詠日。御衣かけの松えぼしだちの岩がござる。景行帝の時いまだえぼしハなし。或ル社神宝ニ渋谷の

金王丸が太刀と云かござる。銘を見るに達摩正宗也。時代違ふ事甚し。

○ 諸社の神事祭礼ハ今絶てなき事も多く、又あらぬ事ははじめたるも大分ござる。昔は舞楽など有し所も今は絶果て、昔なかつた太々神楽など云事をこしらへ、むかしの楽器、残りなどを集て是に用るやう成事に成りました。其内熱田の印地打か止ミ、国府官のなをひの神事の、かた斗になりしハ往来諸人の悦びてござる。

○ 近き比より所々の寺や町並の修験などさま／＼の祠を建て、祭礼とて神楽をする所、幾等も出来ました。何れも風流のちやうちんなど夥しくともいて、賑ふ事で御座る。むかしなかつたことござる。

○ 七八十年前迄広井八幡の祭礼八月十五日車三輛有之、今よりハ賑ひおりました。太公望の人形、いたてんの人形司馬温公も御座た。其後一輛焼失致し式輛曳ありましたがそれも今ハとんと止て最早しらぬ人が多ふ成ました。

百姓

○ 何事も次第に自由な事を工夫致し万事はかやりなことが出来ました。昔は今の様な稲こぎの道具もなく、こばしでこきおりました故、人手間も多ふ御座たが、今は稲こぎが出来て、人すくなで、しかもはかが行ます。夫レで稲

こぎの事を其時分ニハやめなかせと申しました。千石とほしといふもはやり出し、ふたりろくろばかり有たが、是もしんこを工夫して一人してひく故、自由能なりたれど、今はむかしから有ることのようにおもひ、さして、はかゆきとも思いませぬ。

百姓

万事世につれておごりも出来るでござる。近ひ比迄、小百姓の家に床の有ハなかつた。門、背戸にも藁を竹で筋違に狭ミ、戸の代りに、是で事足りたに、今はちつと頭ま上ケた者は、床の事ハおあて色々物ずきだらけ、身の廻りも夫レに准じ、有松しほりの手拭もおごりとおもふにちがひたるは、冬のかぶり手のごひは、あたたかでよいとて、わた手拭と云が出来て、おかいこわたを色々に染て、表の方ニハさまざまのつぎを付てかぶるやうな事になりました。天氣のよい日も用事あるきにハ、皆木綿合羽をきる事一統の事でござる。

○ 嫁入着物まで大かた手作の、ベにはな染の裏で、表はな色もめんにも、もやう付て事済ミをつたに、今は絹紬ハなき織物でなけれハならぬように成テ、縮めんの、りんずのと云類斗で、昔のようなことハとんと絶はてまして、ちつと頭あげた者ハ駕に乘やうに成りました。

○ 慶長年中藤田民部の判有払米の書付に

一、米百十七石 此小判二十六両 但一両ニ四石五斗替
一、米五十三石九斗七升一合 此小判十一両 但し一両ニ四石八斗五升かへ

今は殊の外高直なる事で御座る。尤其時々金子の割にもよる事ながら、近来ハ左様な事ハござらぬ。併、其比ハ村方免相も一統に高う有て、六ツ七ツ位の所が多かつた様ニござる。

○ 近年ハ女中の風俗が變りて、中から下ハみなかぶき役者の風に近う成りました。昔ハかほをあらわさぬ為の綿ぼろしなども、頭のかざりのやうに成、扱、櫛、こうがい、かんざしなど二三本もさして、それが金銀の物好、様々でござる。或ハくしおさへ、びんはりとやらんのと申て、無益の道具が大分出来ました。何れも昔なかつた事ばかりでござる。扱、近年ハ町方ハ勿論、女子に羽織着たるが見えます。小判月代刺た幼女も見へます。かやうの事ハとんとむかしなかつた。珍らしい物好をして絵に書た唐子乃やうな衣服を着たるも大分ござる。

○ 万治四年迄ハ御城下に時の鐘もなく、御城の太鼓斗で御座た。火見櫓と云もなかつたが、享保十二年に出来たれども鐘と盤木であつて、其後元文中初て太鼓に成ました。

○ 今ハ女の菅笠をかぶる事ハ止果て、皆青紙張の日傘をさします。昔は小児にさしかける斗にて、色々の彩色したる絵を書たるにて、ござったが、その様成ハ今ハ無く成りました。近ひ比は出家、町医者、或ハ隠居の輩など迄日傘に成ました。

○ 昔ハ諸色下直な事でござつた。元禄年中熱田大薬師の堂御修復がござつた。其時の諸色買上帳の残て有を見まするに、ことの何れもかも下直な事でござる。どうした物か知ませぬ。

- 一、松丸太長式間末口四寸 一本代五分
- 一、同末口六寸 代老奴七分
- 一、栗丸太長式間末口五寸 拾本代三奴八分
- 一、大奉書一帖 代老奴八分
- 一、小奉書一帖 代老奴四分
- 一、間ニ合鳥子 長四尺 拾枚代上五分 中三分
- 一、釜 釜た共ニ 代十二奴五分
- 一、鍋 釜た共ニ 代四奴五分
- 一、鍬柄共老挺 代三奴
- 一、突棒 サスマタ 綴リ 何れも 一奴八分 柄共ニ 一奴五分

其外種々の物ござつたか、何れも殊の外下直成事でござつた。

○ 元禄年中に江戸廻船百三十五艘御座った。今はやうやう四十五六艘ならでない。其比はうんちん一般で十一兩二匁位でござった。今ハ七兩斗もするかしりません。

○ 元和の比ハ御家の諸役所も事少なにあつたやう。御納戸役と云もござらで、何ンぞ御納、出しひきの御用があれハ何役で御座た存せぬが、曲淵八右と云仁が、其とり扱ひを致せし也。元和九年に大猷院様御上洛被遊た時、源敬様も御上り遊して、御跡で山下大和の内室と竹中源助の後室と二人して御納戸の出ひきの御用あれば取扱ましたげに御座る。其後羽鳥平次、山田金左、成田藤右とやらん、始て御納戸役ニ被仰付たと或老人の咄されました。

○ 我等か母ハ九十三てのふなりました。夫から今年まで最早四十年、其人の常にかたられしハ、十七年之時よめ入してござつたげにござるが、其頃迄ハ簞笥といふハなく、小袖櫃斗、振袖もことの外、みじこふて済ましたげに御座る。今やうのやうに附金といふものもなく、いろいろ道具を持参のことであつたげにござる。鍋、釜、碁盤、双六局迄もつけ道具にした替り御座る。今ハ簞笥もいろいろ出来て、此頃は四尺のたんすができ、上の抽匣へ今の四尺振袖を延て入、男ハ大小のさし替てもいるためか、下の三ツにハ脇に小ひきだしをつけて、其外自由なこと、其小そで櫃ハ見たこともなひ者が多ござる。又になひとて、上つかたニ

ハ、残りたる笈足付たる半櫃、小袖櫃ニも笈あしの付たるもあれど、下さまにては一向見当らず。行器さし樽も今ハ田舎の祭礼、熱田の御神事などにてつかふ計。其余は立花町の古ル道具屋に角赤、あるハ鏡台、或ハ御厨子、黒棚とならべてある斗。是も今改め作らねハ、はてハ跡かたもなくなるらん。車長持さへ早やまれくになりましたとて、古風は流行ませぬ。夫故われらがいふことハ、若い衆か嫌われます。

いづくにか 身をばよせまし世の中に
老をいとわぬ人しなれば
よふ読た歌でござる。

町人

○ 夫ハ百年のむかしのこと、違ふ筈でござります。四五十年先迄ハいろいろの音頭にて盆ハ踊りがござりました。東掛所の前、人家のうらに芝居地とて穴地がござる。是などにて大踊かござりました。しかし奢らぬこと御座りました。そろへといふても白晒の帷子に黒縹子の帯て、むすめの子のよくおどるを撰みて踊らせ、私も其頃は、こふて柏子木打をいたしました。其後町々にて六七尺四面の家台を持あるき、其中で音頭をあげ、その家形を廻りておどりました。取分、七夕ハ所々のてら子屋にて、いろいろの作り物

などいたし、子供におどりをさすること御座りました

が、今ハ更にござりませぬ。その後三十年斗以前、少し奢がついて舞台をこしらへ、花美の衣裳をかざりて、ものごと、ことやう成ければ、上より夜の御とめにて、昼計天幕を張て歌舞伎役者のやうに正面を向て踊しが、是もいつとなく絶へて、その後二十年来先に梵天大きにこと破れて、

車を引、ねりものを仕出し屋夜を分すおどり狂ひしより、今ハ伊勢音頭を三味線此之伝永禄年中 琉球ヨリ渡ルに調して、瞽女・座頭のいとなみに残る。かく五十年来の間にさへ替りますれハ、まして百年のむかしハ思ひやられませぬ。

○ 此頃ハ大きに山か鳴ました。古き渡りの若宮寺、東掛所ハ殊之外響きましたげに御座る。浅間山が南へとやらん焼ぬけたげにござる。わしが今年八十になります、二三才の比か富士の山焼にて、宝永山を吹出したる時、武州ハ三日三夜くらやみにて、やけ砂をふらしたるよし、我等初詰の比迄ハ江戸市買の館の所々に買残りて御座た。其頃迄ハ其時詰合の人も生残る居、実物語を聞きましたが、すさまじい事にござつたげに御座た。焼砂五六寸もうまりたるよし、今度の浅間も其類なれハふしぎのことハなけれ共、珍らしい事で御座る。長生きをすればいろいろの事にあふことで御座る。

あとがき

余白を利用して若干のあとがきとしたい。ここには入れなかつたが、文中に八葉の挿絵が描かれている。この絵を隠士の筆とみれば、彼は絵心を持った器用な人物であつたように思われる。

ところで、享保のころ、藩主宗春の政策によつて名古屋の繁華は、三都を凌ぐ勢であつたと云われているが、本書はそうした都鄙の状況を具体的に示している。蓑笠姿から木綿合羽姿の百姓へ、「近年は百姓衆が半分は商ひをして農の片手間におらがまねせられる」百姓たち、千齒抜き、千石とおしによる農作業、綿手拭のほおかぶり、管笠から青紙張りの日傘の一般化、さらに名古屋でも京都にも見られないような菓子箱の出現から、しつぽく・とち汁料理店の出現、まんじゅうのある菓子屋は両口屋(現存)のほか一、二軒で、「菓子に饅頭が出た」というのが大変なもてなしなどといった指摘から、尾張藩領の生活文化をうかがうことができよう。なお原稿化にさいしACCの葛城節子さんのお手数を煩わした。記して感謝の意を表したい。

(立教大学教授)